

第3節 日本内運動

1933年 満州事変を契機として日本内朝鮮アナキスト運動も戦闘期に近づいてきた。戦闘に際しては、宣伝に力を注ぐことは常に重要な心構えであり準備である。この時から各団体は万難を排して一斉に宣伝の砲門をひろげた。

1. 黒友連盟と『黒色新聞』

1930年5月から黒友連盟は李汝烈を機関紙発行責任者に選び、洪承祐と協力し『黒色新聞』発行を急ぎ、同年8月1日創刊号を出した。この創刊号は「不合理な現社会に対し革命的行動で突進しろ」という表題により、3000部を押収された。しかし連盟はこれに屈せず、同年同月23日再び再版を刊行した。当局は再び紙型と共に3000部を押収し発行人を新聞法違反罪で逮捕した。連盟は再び9月1日付で第3次発行を敢行した。当局はまた紙型を押収した。

『黒色新聞』は創刊号から攻撃・反撃を与えまた受けながら出帆した。そして1935年5月6日、連盟の財力が乏しくなり、やむなく廃刊せざるを得なくなるまで、毎号発売禁止、紙型押収、発行人と編集生幹の拘束、罰金など故意の妨害と苛酷な弾圧が待っていたが、当事者達は苦難を冒して可能な限りの方法を動員して密封した新聞を国内外に発送した。

1931年4月には 機関紙発行に関する方針を更に強力に打ち出すために、黒友連盟は次のような企画を決議した。

1. 新聞の名称 黒友新聞
1. 財政の負担 在日朝鮮アナキスト団体、労働組合 其他
1. 編集委員 崔学柱、吳佑泳、陳哲、韓何然、梁一東、吳致変、崔洛鐘、閔魯鳳、丁賛鎮
1. 編集方法
 - 1) 毎月25日、編集委員会を開催して、編集方針と原稿内容を決定して月末までに原稿を提出すること
 - 2) 編集実務者会議で記事を按配すること
1. 発行過程 本国で子母を講入し、東京で鉛活字を調達して造版後、紙型を写して印刷すること
1. 印刷責任 崔洛鐘

自由ミューン社

1932年、洪性煥(1906～1975)と韓何然(1903～1960)を中心に「自由ミューン社」を創立して『自由ミューン』を発行した。『黒色新聞』ひとつだけでは、宣伝手段が中断せらるることを憂慮したためである。日本では1000円の保証金

だけ納付すれば、合法的発行手続きが可能であるため、発禁または廃刊処分をあらかじめ覚悟して、国内・国外の各友好団体及び同志達に毎号1500部ずつを密送した。『自由ジューンの編集は、当時日本大学社会科学科在学中の洪亨義が担当していた。1934年2月に、彼は学生事件で日本から本国へ追放された。定期刊行物以外にも、全寮村が翻訳した。ワロホトキンの『法律と強権』その他のパンフレットも同じ方式で各方面に発送されていた。

1931年4月7日 東興労働同盟第9回大会は、次の議案を決議した。

- ① 帝国主義戦争 絶対反対
- ② 改良主義的 社会政策 排撃
- ③ 啓蒙運動の徹底した実践
- ④ 労働者の渡日防止 反対闘争

同大会は従来の綱領を次のとおり修正し通過させた。

- 1) 私達は自由連合主義をとり労働者階級の解放を期する。
- 2) 私達は中央集権的組織を拒否し自由連合体制をもて戦列を整備する。
- 3) 私達は政党の政治運動を排撃して労働階級の直接闘争を叫ぶ。

同年4月31日 黒友連盟の吳致変は『黒色新聞』第3号を無届配布した罪目により逮捕された。

同年5月1日 メーデー行事には東興労働同盟員500余名と朝鮮自由労働組合員100余名が参加し、示威の末、多数拘束された。『黒色新聞』は、この時、次のようなビラを配布した。

「メーデーだ！ 決戦の日 メーデーだ！ 尊厳の日 メーデーだ！ 黒旗のもと集まり戦列を整えよう！」

同年7月8日 『黒色新聞』は万宝山事件を起し、韓中兩民族離反を画策して流血の惨状を演出させようとした日帝の凶計を暴露する宣伝ビラを配布した。同月14日には東京のアナキスト団体共同主催の万宝山事件糾弾演説会を開催した。

同年8月30日付『黒色新聞』は関東大震災朝鮮人虐殺記念号を出して、「回想し、9年前9月1日を、抗拒し、支配階級の暴虐に」という題目の国文印刷物を各方面に配布した。

同15日 東興労働同盟と朝鮮自由労働^組合は共同で神田区中央仏教会館で震災被害虐殺同胞追悼及び批判会を開催した。吳致変の演説を臨席警官が、中止命令を出すと同時に強制解散させようとした。聴衆はデモを敢行しようとしたが、多数が拘束された後、解散せられた。

1932年には崔学柱が『黒色新聞』発行と編集を担当したが、新聞社の賃貸料滞納で強制立ちのちの事態に至った。これに耐えず抵抗した多数の同僚が家宅侵入、公

務執行妨害及び傷害罪で拘束される事態を招いた。こうして、活動の一時停滞を余議なくした。しかし崔学柱、金麗鎮、崔洛鐘らは続刊の為総力を結集した。

同年10月下旬、神田区西小川町2-6番地に新しい事務所を置き、第9号を発行した。資金難を極力打開しながら、11月15日 続いて第10号を発行した。

一方、芝浦職業紹介所を中心として、その周辺には働き場を求める多くの自由労働者がいた。全協系(共産系)労組は、これらを傘下に収めるべく策動していた。東興芝部は必死にこれを防いでいたが、より徹底した根本的対策が要求された。崔洛鐘、金承植、崔鐘観らは(李東遠) 黒色労働者連盟(日本人)の小村真積と労働者自由連盟(日本人)の上村真など協議して、3つの朝日労働団体を連合した芝浦労働者自由連合を結成し全協系の浸透工作に対処した。1932年7月31日この連合は、『自由連合新聞』号外発行を協議中主導者李叔弘(李允熙)外5名が逮捕された。

李允熙(1906~1951)は1929年東京で「教化運動社」と「黒色朝鮮人社」を創立して20余名の同志を糾合し、思想運動と労働運動に力を入れた。解散後は独立労農党地区党委員長を引受け活動したが、6.25動乱当時共産軍に殺害された。

1932年8月29日『黒色新聞』第18号は、国恥記念特集号を出して激しい論調で日帝のアジア大陸侵略の野望を攻撃しながら、韓中両民族の決起を求めた。

2. 1933年の運動状況

1933年現在の日本内朝鮮アナキスト団体は次の表の通り

・東京地方

団体名	創設年月日	責任者	機関紙	会員数
黒友連盟	1928.1.15	洪性煥、韓何然、河環尙	黒色新聞	30
自由青年連盟	1928.1.15	韓何然、李承植	自由ミューン	20
東興労働連盟	1926.9.10	梁一東、閉興圭、朴春実		350
同 芝部	1929.11.17	崔洛鐘、崔鐘観		50
同 北部	1931.5.25	金学俊、任学宰		20
同 高田部	1927.2.9	朴哲、金春燮	土民	30
黒色労働連盟	1930.6.14	丁賛鎮、李聖勲		30
東京一般労働連盟 (朝鮮自由労働組合)	1933.1.23	吳宇泳		50

・大阪地方

アナキスト青年連盟	1930.11	金漢秀		18
東方労働連盟	1930.11	李美鶴		29

・兵庫地方

神戸朝鮮同友会 1931.6.21 張成賢 25
・愛知地方

中部黒色一般労働組合 1931.5.1 朴愛朝 10

(この表は 金正明 編著、明治百年史叢書、朝鮮独立運動による)
<1933年の総合的運動状況>

(1) 4月4日 東京で開催された日本、全国自連大会に東興労働連盟、自由労働組合、黒友連盟など朝鮮アナキスト団体も参加し、李允熙は書記に指名された大会の議事進行に協力し、朝鮮アナキスト代表達は開会に先立ち委員に基金の接受を要請した。

(2) 5月の第14回メーデー行事にあって、朝鮮アナキスト各団体は日本の各団体と提携し、吳宇泳、李允熙、梁一東、崔学桂を代表として準備会議に臨み、闘争目標を反ファッショ、反帝、反失業の三反闘争に絞り、行事当日果敢な闘争を展開した。

反ファッショ闘争はメーデー行事でも闘争目標として設定されていたのと、再びこれを徹底的に貫徹するため、5月以来ナチス排撃運動を強靱に展開しながら、米国で拘束されたアナキスト、ムウニとヒリス両人の釈放を求める民衆大会、演説会などにも参加した。

5月29日の梁瀬自動車工場争議の時、東興芝部は組合事務室を争議本部として提供しながら、同盟本部及び各自由連合団体の応援を得て争議を勝利に導いた。

6月に自由労働組合の吳宇泳、李允熙らは在東京アナキスト労働団体を「自由労働者協議会」という連合体で統合べく交渉を展開し、東興芝部と極東労働組合の呼応を得た。そして再び東興本部と交渉したところ、崔学桂、閔興圭らがこれに反対した。このようにして連合は実現しなかつた。日本アナキスト陣営内の「自連」と「自協」の対立、または統正アナキズムとアナル・サンジカリズムの対立の影響を受けたことを意味する。

9日には本国南鮮一帯を襲った風水害罹災民救援のため吳宇泳、閔興圭、丁鏡鎮らが寄付金募集許可願を所轄警察署に提出したが許可されなかつた。朝鮮アナキスト団体らは在日本各団体に飛檄し、親日反動団体を除外した「本国風水害罹災同胞救援会」を結成して活動を展開した。

10月には水害救援活動を契機として各界代表を網らした「我ら、俱樂部」に梁一東、韓睨相らが参加し活動を継続した。

9月1日 金春爰、金寒村らは「土民社」を創立して『土民』創刊号を出し続けて第3号まで発行した。しかし全て発行禁止にされた。

東興同盟の梁一東は5月上旬『黒色新聞』を代表して、国内同志 凌波と、東京アナキスト運動の近況を通信して、国内及び中国内のアナキスト運動の近況と有吉公使事件関係者元心昌の消息を書面で問い合わせた。

東興芝部の崔浩鐘は2月に印刷所「三文社」を引受け、朝鮮アナキスト団体の

出版物を全て引受けて印刷した。2月16日 東興同盟は『芝浦労働者ニュース』第1号を発行した。去る1928年6月7日の東京留学生・学友会事件に関連し逃避中であつた東興同盟員金炳運が3月25日警視庁に逮捕され検事局に送致された。

1933年に黒友連盟は主に新聞雑誌及び各種の冊子による宣伝活動に力を傾けた。連盟員韓何然は極めて甚だしい生活難のため自分が住んでいた黒友連盟事務所の家賃を何ヶ月か滞納しており、同年4月下旬家主と言い争つたが、やむなく退居費を受け取り妻子を帰国させた。『自由コミューン』主幹 洪性煥は同年3月12日付 第2巻 第1号 200部を発行分布した後、資金難のため廃刊した。

1933年3月17日 中国・上海で起つた南華韓人青年連盟による有吉公使暗殺未遂・六三亭事件は日本にいる同志たちを非常な興奮のるつぼの中に位置した。更に拳事3同志中 元心昌は一時期 東京黒友連盟の中心人物ではなかつたか。『黒色新聞』は自慢するように事件の真相を報道すると同時に、日帝の中国侵略を明白に糾弾する一方拘束された同志たちの救護運動を扱った。

被搾取階級解放問題を被圧迫民族解放問題と不可分な関係にあると考える朝鮮アナキスト達に対しては、民族解放により日帝と抗争する全ての独立運動団体・個人は友軍であつた。1924年1月5日 宮城の二重橋に爆弾を投げた金祉燮、1932年1月8日 桜田門前で 觀見兵式の後 帰る天皇に投弾した李奉昌、彼らは皆最も親密な同僚であり、朝鮮アナキスト達の熱烈な觀呼を受けながら、在東京 朝鮮アナキスト団体らは彼らに慰問訪問、金品差入などで精誠懇感した同志愛と同胞愛を惜しみなく注いだものである。更にこのたびの六三亭事件の3同志は思想まで同じくする血盟の同志達ではないか。

〈日本アナキズム陣營の分裂〉

私達はここでこの時期の日本アナキスト陣營内部に目撃して現れるアナキズムの根本理念に関する論争と、これに由来する 自連と自協の争いを過程を追つて見てゆく必要を感じる。そのようにすれば、朝鮮アナキスト運動の底に流れている被圧迫民族解放に対する宿願が保たれているところの意味とその特性が鮮明に浮き彫りされると考える。

1920年代末から30年代初頭にかけて日本アナキズム陣營内に純正アナキズムとアカリ・サンジカリズムとの理論的対立が頭をもたげ始めた。前者の代弁者は岩佐作太郎と八太舟三であり、後者の代弁者は石川三四郎であつた。

八太舟三によれば、労働運動史は失敗の歴史という。すなわち労働運動は(1)支配者との妥協を研究する(学ぶ)参政運動になつたり、(2)資本家との妥協を研究する経済的直捷行動論になつたり、(3)独裁政治に連結される(強権的)革命運動になつたり、3種類のうちのどれかに属する労働運動も、これに立脚するサンジカリズムも皆同じく否定する。

このようにして労働組合運動軽視または無視の態度を取る。

これと反対に石川三四郎はアナル・サンジカリズムの立場で、アナキストは事情が許諾する限り、出来るだけ多く各種の労働組合の内に入り、行き、内外呼应し改良的組合を革命的組合に作り変え、革命的組合をアナキズム的に改革しなければならぬ。サンジカリズムとアナキズムは全く同じ自治と自由連合を第一義としている。強権を否定する点でも両者はまた一致する。アナキズムとサンジカリズムは互いに手を握り協同しなければだめだと主張している。

このような理論的対立は結局日本アナキズム陣営内に労働運動戦線の分裂を呼び起こしていた。

1926年5月に結成された全国労働組合自由連合会(略称 全国自連)は、

- 一、我々は階級闘争で労働者、小作人解放運動の基調を組む。
- 一、我々は産業別組織による自由連合主義を提唱し中央集権主義を排撃する
- 一、我々は一切の政治運動を排斥して経済的行動を主張する
- 一、我々は帝国主義的侵略に反対して労働者階級の国際的団結をガガけて公然と示す

などの4つの綱領を採択した。

1928年になって、27年の中日戦争以来の金融恐慌はより一層悪化して、総同盟(社会党系)評議会(共産党系)自連(アナ系)など全国的労働運動組織は深刻な危機を感じていた。このような状況下の同年3月、東京大学仏教会館で全国自連第2回大会が開催された。

この大会で自由連合主義をガガけて公然と示す純正アナキズム派は「我々は自由連合主義で労働者農民解放運動の基調を組む」という一項からなる綱領修正案を提起したところ、対するアナル・サンジカリズムに立脚した労働組合擁護派は既存綱領を若干手直しし

- 一、我々は階級闘争で労働者農民解放運動の基調を組む
- 一、我々は政党・政派に依存せず一切の権力に対し労働者農民自身の手で抗争する
- 一、我々は自由連合組織を強調し、中央集権組織を排撃する
- 一、我々は帝国主義に反対して労働者階級の国際的団結を促進する。

など四項の修正案を提出し、両派が正面から対立した。この対立で両派は寸分の譲歩もなくきびく争い、自連残留派と離脱派に分岐し、もてなくとも弱勢になっていたアナキズム陣営を致命的退勢に追い込んだ。

1926年6月に自連離脱派は自連と別個に日本労働組合自由連合協議会(略称 日本自協)を結成した。自協は機関紙『労働者新聞』(黒色労農新聞の改題)、『黒旗の下に』などを発行して、自連は『自由連合新聞』(『自由連合』の改題)、『黒旗』などを発行して互いに対立を続けた。

3. 1954～5年の運動状況

1934年1月から黒友連盟の李東淳(1908～1977)が『黒色新聞』編集委員を引受けた。この新聞は上海で南華韓人青年連盟の楊汝舟が送った「三同志 追憶 漸想」「在獄三同志の回想」「在中國朝鮮無政府主義運動状況」などの記事を書き中国内運動と日本内運動との連絡と綫索を強化した。楊汝舟から上海で活動する有能な闘士を送り、これという付託もあった。そこで当時日本大学社会科学科学生として黒友連盟に加盟していた李鍾鳳(何有 26)を選定し、上海に送った。

〈黒色新聞の伝道〉

1934年1月25日付『黒色新聞』第24号は「1934年の闘争血路に立つ満天下同志に檄す」という題目のもと、アナキズムはまだ組織理論が確立していませんでしたので計画的組織活動によく熟達できなかった。このため社会各分野に進出することが活発に出来ぬことは我らの大きな欠点だと卒直に自己反省をした後、この欠点を清算し克服して社会各層に我らの戦線を確立、強化しなければならぬと叫び訴えている。このことは、日本アナキスト陣営が「自連」と「自協」との分裂対立で退潮を自招していることを見、その事情を悔むのではなく反省し、新年の仕事の始りの悲愴な決意の表明といえる。同じ号に上海六三亭事件の報道とあわせて、革命において直接的暴力の不可欠であることを是認して、これを煽動する論文が載せられている。

2月28日付同紙第26号は「3・1行動に思想があるように」という表題のもと「現下の客観的情勢は私達に第2の決戦を要求する」と強調して自由連合戦線の拡大強化とアナキズム思想の民衆化を重ねて主張している。

梁-東は上海滞留中に知るようになった南華韓人青年連盟、柳子明、鄭華岩外7名に『黒色新聞』『土民』『無軌道列車』などの出版物を密送していた。有吉公使事件関係者、白貞基、李康勳、元心昌が日本に押送された時、梁-東などの在日同志らは彼らの救護運動に活躍した。

6月30日付同紙第29号は上海「林友」署名の「在中國朝鮮アナキスト運動概況」という文を書き、7月31日付同紙第30号は「島波白貞基同志追悼文」を、10月24日付第32号は上海「今日」署名で「人間の欲求は指導理論は不必要」という題目の文を書いた。

このような事が日本官憲の神経をひどくこがらせたことは火を見るより明らかである。そのうち、何の財政的援助の裏付けもないことに注目していたのも事実である。『黒色新聞』は前年と同様に1934年にも1月25日付第24号から毎号、例によって発売禁止を受けていた。しかし5月22日には保証金として借用した金額に対する延滞利息を督促した日本債主が独断で差押手続を取ってしまった。そして新聞紙法による復刊届を出さなければ5月30日付第28号1000部を発行したという罪目で発行人李東淳は7月3日略式判決により罰金30円を支払わなければならなかった。このような環境の中で新聞を維持するという

とは並大抵のことではなかつた。

〈解放文化連盟での参劇〉

崔学桂は『黑色新聞』を代表して3月23日「出版活動協議会」に参席し『自由連合新聞』外6個の日本アナ系新聞雑誌代表と共に「解放文化連盟」の組織に参画した。

全寒村、金春俊は文芸誌『土民』を1934年に2巻4~7号及び特別号300部ずつを発行したが、ほとんど発売禁止にされて出版法違反罪で罰金30円を支払うなど財政難を免がれることはできなかつた。

この頃に日本アナ陣営には『文芸解放』、『単騎』、『黒旗は進む』、『矛盾』、『黒色戦線』、『黒戦』、『アナキズム文学』など多くの機関紙が刊行されていた。新居格、秋山清ら多数の文人がアナキズム文化、文芸運動を展開していた。

『アナキズム文学』は次のような主張をしている。

「アナキズム文学の宣揚は純粹なアナキズム思潮の明確な宣揚で始められた。一まず、アナキズム文学の文学的出発は、その字体の最も文学であることを何よりも先に要求する。ブルジョア文学とボリシェビキ文学に対し、本当に人間の根本に立脚した文学であることを要求する。」

アナキズム文学はボリシェビキたちの到ったところの「政治主義文学」とも違ひ、ブルジョア達の到ったところの「職業主義文学」とも違ひ、人間の人間性解放の文学ということである。ボリシェビキ達が文学の芸術性を無視しその政治性だけを強調することと対照的に「文学の製作は個人の文学的才能の極致で産出される以外の何ものでもない」という。

『文芸解放』は次のように宣言する。

- 「一、我らは過去一切の歴史と絶縁し、新しい我らの歴史を創造する
 一、我らは一切の屈從的精神を排撃し、自由合意による連帯社会を創造する
 一、我らは詐欺的政治運動から文芸を解放する
 一、我らの文芸は自然発生による目的意識を強調する」

文学は何を成しているか、人間の享樂的衝動を満足させる為であるのか、どんな階級の解放のためであるか、どんな民族の解放のためであるか、個人的衝動の満足は何のためであるか、抑圧された階級や民族の解放は何のためであるのか、結局は人間の人間性を解放することのためではないか、人間が人間らしく住むためではないか、この目的に最も良く奉仕する文芸という、その自体高度の芸術性を必須的條件にしなければならぬ。

〈罹災同胞救援運動〉

去る年に在日朝鮮アナキスト団体は母國の風水害救援運動を展開した。しかし警察の募金不許可のためなすことになり中止してしまつた。このたびは金額の多少に関らずアナキスト陣営内で行うという方針のもと「南鮮地方水害罹災民救援会」の看板を掲げて宣伝活動

を上げた結果、応募金 263円50銭を京城日報社に寄託した。

再び10月に入って、関西地方風水害救済基金募集におき活動した東興労働同盟同芝部、朝鮮一般労働組合、黒友連盟など朝鮮アナキスト団体は「全国労働組合自由連合会」に合流し10月9日、梁-東、金沢、李炳燁、洪性煥外8名を神田神保町、同小川町、本所亀沢町電車交叉点、芝大門、新宿などに派遣し、日本アナキスト団体員と協力し義援会を募集すること、民族を超越し韓日間の理解と協調を増進することに寄与した。

〈在獄同志支援運動〉

一方有吉公使事件で白貞基、元心昌、李康勲など三同志が4月14日治安維持法違反、爆発物取扱法違反、殺人予備、器物毀棄などの罪名で所轄検事局に送致され、4月17日予審回付の後7月5日予審が終結し、長崎地方裁判所公判のため7月11日日本に押送された。

以来、浦上刑務所支所に収監され、11月15日第1回公判が開廷された。

元心昌、白貞基両被告に無期、李康勲被告に15年刑が求刑され、11月24日の再開公判で求刑どおり言渡された。白貞基、李康勲は直ちに上訴権を放棄し、元心昌は不服訴訟したが12月19日訴訟を取り下げた。

三同志が日本に押送されて来るや、東興労働同盟の梁-東、崔学桂と黒友労働者連盟の丁積鎮、極東労働組合の陳哲、黒友連盟の洪性煥などは押送地を確認した後、国際的救援方法を探求することを協議し、7月以来、関西方面の同志達と固中探問の結果、元心昌の通信で浦上刑務所に収監された事実と11月15日公開公判が開廷される予定という事実を知った。救援活動費用として黒友連盟事務所を明渡して得た30円を充当し、まず洪性煥を代表として長崎に派遣した。

11月13日長崎に到着した洪性煥は3同志と面会して金品を差入した後、弁護士を選定し、公判廷に多数の同胞を傍聴に同員するよう工作した。しかし公判当日裁判長は傍聴禁止を宣布した。公判の結果に対し3同志が控訴を放棄した事実を知るとは万事休す。11月17日東京に帰った。

〈労働運動〉

東興同盟と東京一般労働者連盟など朝鮮アナキスト労働団体は日本アナキスト団体の日活争議に吳宇泳、閔煥圭、李宗文、金沢、李炳燁らを派遣し応援した。再び9月の東京市電及び豊隆社印刷所労働争議には東興同盟の梁-東外7名、一般労組の吳宇泳外3名が応援に参加し、東興同盟事務所入口に「血まみれで戦っている市電争議、日活映画従業員争議、豊隆印刷工争議を勝利に導こう」というポスターをはって宣伝に猛活動をした。

朝鮮自由労働組合と極東労働組合の組合員は東京市江東橋職業紹介所を

通じて仕事を得ていたが、6月から市当局は不純分子を掃蕩する目的で押したてて組合員の登録を取り調べて手帖の返還を強要してきた。文聖煥、吳宇泳らは対策を模索した。全協系(共産系)共助会と協力し、暫定機構として「江東橋登録労働者協カ会」を組織し、これに対抗することとした。我らは、ここに日本経済界の恐慌が深刻になっていることがいえることができると同時に、左翼労働者運動に対する当局の悪らつな弾圧を実感することが出来る。

しかし、アナ系とホル系との暫定的提携は長らく続かぬがなかつた。労働運動での基本路線が違っているためである。吳宇泳らは、この協カ会を脱退して新しい純粋なアナキスト団体を準備し、10月23日宣言綱領、規約を各方面に配布して同志を糾合した。1935年1月24日、創立大会には準備委員会の吳宇泳外11名、各友誼団体と東興労働同盟の李東淳外3名が参席し李圭旭の司会、李名熙の経過報告で「東京一般労働組合」を結成し、次のような綱領と規約、宣言を満場一致で可決した後閉会した。

・綱領

- 一、我らは自主的団結で日常闘争を通じ労働者の解放に邁進する
- 一、我らは中央集権組織を排撃して自由連合組織を強調する
- 一、私たちは連帯、友愛、協力を社会生活の基調とする

東興労働同盟事務所は1933年に梁一東(日本人名山本茂の名義で)が借家していたものであるが、契約違反と賃賃料滞納のため家主側が訴訟を起し勝訴したので、強制明渡執行を受けた。

同盟は組合員獲得と主義の宣伝のため、無届出で同年3月25日付『朝鮮東興労働ニュース』第1号を発行分布した後、続けてこれを発行したが、毎号発売禁止にされた。同年9月12日、発行者梁一東は逮捕され出版法違反として9月18日所轄検事局に送致されて、11月13日罰金30円を支払って釈放された。

1934年11月23日、東興労働同盟北部は東京市荒川区三河島町城北仏教育年会館で第2回総会を開いて「過去の終局的状態を打破して新しい方針と気魄で前進する」という趣旨で「朝鮮労働者合同組合」と改称した。議長を吳宇泳として、金学俊外60名が参席し、会の名称、宣言、綱領、規約を審議可決した。

その間、東興同盟北部責任者金学俊の家(荒川区三河島町2-249番地)を事務所として使用したが1935年3月2日から荒川区南千住町113番地に事務所を移転した後、7月30日に『朝鮮労働者合同ニュース』第1号を発行して続けて第5号を出したが、毎号発売禁止にされた。

1935年X-デー標語は「擧遷の日、決戦の日」と定められた。極度に達した当局の弾圧と極めて甚い生活難を感じさせる標語である。東興労働同盟、朝鮮

労働者合同組合、朝鮮一般労働組合、黒友連盟 などが参加した。宣伝は3500枚を散布して一部は押収された。示威を敢行して、拘束者が出た。

『黒色新聞』第35号は、一層論調を激烈にし「解放運動を圧殺する本港、フアジヨ議會を粉碎しろ」と煽動し、第36号は「3月の三大事件、上海BTP(黒色恐怖団)二周年」と題して有吉公使事件同志らを讃揚して、第37号は「暴虐無道な植民政策、高等教育廃止論を一撃の下に粉碎しろ」と呼訴した。

この新聞は李東淳が編集を担当して、四方に財政難打開を模策したが解決方法がなかった。各団体が協議した末、丁積鎮に責任を任せた。しかし丁が拳銃事件にからむ窃盗の汚名を着て瀧野川警察署に拘束されたので黒友連盟の洪性煥がかわり、3月28日第36号、4月22日第37号を発行したがやはり資金難に陥り、5月5日丁積鎮が釈放され続刊を模索したが万策つき、1935年5月6日在日朝鮮無政府主義者運動に不滅の功績を残しつつ廃刊の悲運を負ふことはできなかった。

〈東京・上海 国内連絡関係〉

玄永変は朝鮮中樞院参議 玄徳の長男として1931年3月京城帝國大学法文学部を卒業した後文学作品と社会思想書籍を渉猟する間にアナキズムを信奉するようになった。

1931年7月17日、元心昌を捜し上海に渡り南華韓人青年連盟に加盟して外国文書の翻訳、機関紙社説の執筆、内外運動の紹介及び連絡などを担当していた。上海滞留中には元心昌、白貝基らに運動資金を提供したり、1931年11月13日元心昌のたのみを受けて日本に潜入し東京にいる張祥重、鈴木靖久らと連絡をとり、1932年1月に一時帰国して郭興善同志に李錫圭を紹介して上海との連絡を取るようになるなど、めざましい活動を続けた。

1933年12月に再び東京に渡り東京府学務部社会課に勤務しながら梁-東、竹内テロ、神谷暢などとしばしば接触して『黒色新聞』に獄死したドイツアナキストミツヤムの作品「労働者の歌」を翻訳投書するなどあらゆる面でアナキズムの宣伝に力を入れたが、1935年11月20日東京警視庁に逮捕され治安維持法違反で検事局に送致された。しかし戦争末期には変節し、反動団体、緑旗連盟に加担していた。